

氏名(本籍)	こばし まり 小林 真理 (群馬県)
学位の種類	博士 (音楽)
学位記番号	芸音第17号
学位授与年月日	平成5年9月30日
学位論文等題目	メシアンの歌曲研究 - 《ハラウイ》を中心に-
論文等審査委員	(総合主査) 東京芸術大学 教授 (音楽学部) 高木 浩子
演奏審査会(主査)	東京芸術大学 教授(音楽学部) 高木 浩子
(副査)	" " ( " ) 斎藤 一郎
( " )	" " ( " ) 永富 正之
( " )	" " ( " ) 船山 隆
( " )	" 助教授 ( " ) 三林 輝夫
( " )	" " ( " ) 野平 一郎
論文審査会(主査)	東京芸術大学 教授(音楽学部) 船山 隆
(副査)	" " ( " ) 斎藤 一郎
( " )	" " ( " ) 高木 浩子
( " )	" " ( " ) 永富 正之
( " )	" 助教授 ( " ) 三林 輝夫
( " )	" " ( " ) 野平 一郎

## (論文的 内容の要旨)

## メシアン の 歌曲 研究

## - 《ハラウイ》を中心に -

この論文は去る1992年4月27日に死去したフランスの現代音楽界の巨匠、オリヴィエ・メシアンの歌曲作品、とりわけ《ハラウイ》を中心に行った筆者の研究論文である。

第一章においては、メシアンの個性的な作曲技法を理解するために、メシアン自身が書いた『わが音楽語法』(Technique de mon langage musical, Leduc, Paris, 1944) 平尾貴四男訳、東京：教育出版株式会

社、昭和29年(1954)と柴田南雄著「オリヴィエ・メシアンの人と音楽」-『音楽芸術』-音楽の友社1958、を主に参照する。またメシアンがそれらの作曲技法をどのように歌曲作品の中に使っているかを知るために、幾つかの歌曲作品の中の例をあげる。

第一節は移調の限られた旋法に焦点をあてる。第1旋法から第7旋法までを説明する。

第二節ではメシアンの作曲技法の中でも特に大切な“リズム”について考察する。リズムの特徴は次のような6つの項に分ける事が出来る。1) ベルソナー・ジュリトミック、2) 添加価値、3) 従来より複雑な比例関係による拡大、縮小、4) 逆行不可能なリズム、5) 音価のモード、6) ギリシャのリズムである。メシアンのリズムの特徴の源泉ともなっているインドの

リズムについてもこの節で詳しく触れる。

第三節はグレゴリア聖歌と題して、メシアンのカリキスト教精神をまず探ることから始める。そのためには彼自身の言葉を、クロード・サミュエル『オリヴィエ・メシアンとの対話』(Musique et Couleur. Entretiens avec Olivier Messiaen, Belfond, 1986), ブリジット・マサン『メシアン—驚くべき作詩法』(Olivier Messiaen: une poétique du merveilleux, Alinéa, 1989)の中から幾つか引用する。メシアンが幼い時から童話の中の不思議な出来事に興味を抱き、大人になるにつれて神学への興味へと移って行った過程を把握した上で、メシアンが音楽の中で一番崇高なもののみならずグレゴリア聖歌の旋律を歌曲作品の中に見出す。

第四節はメシアンと彼が作品の中に多く取り入れた鳥との関係を明らかにするために、初めにメシアンと自然との出会いを前述の本からメシアンの言葉を引用しつつ探り出す。

第五節ではメシアンが色彩の作曲家と言われている事に注目し、幼い時から魅かれた教会のステンドグラス、虹についてのメシアンの言葉をまとめる。この節では、彼自身の書いた『ノートルダムの講演』(Conférence de Notre-Dame, Luduc, Paris, 1978)が大切な参考書となる。

第二章以降は、歌曲作品について触れて行く。作曲技法だけに注目した第一章に対し、第二章はメシアン自身が書いた全歌曲の詩を訳す事によって、メシアンの思想を中心に探って行く。一曲のみメシアンの母であり詩人であったセシル・ソバージュの詩に作曲された歌曲が存在するのだが、メシアンにとって、母の存在はかけがえのない大きなものである事もこの章のポイントとなっている。第一節の《3つの歌曲》に続く《ミのための詩》は第二節で考察するが、これはメシアンの最初の夫人クレール・デルボに捧げた歌曲集であり、第三節の彼の息子パスカルに捧げた歌曲集《大地と空の歌》と同様にメシアンの神への深い敬愛が伺われるものである。

第三章においては、この論文の一番中心ともなっている《ハラウイ》についての筆者の研究を述べて行く。

《ハラウイ》には愛と死の歌という副題が付いており、メシアン自身トリスタンとイゾルデの伝説を意味するという事を語っている。この点に注目した筆者は、《ハラウイ》以前の歌曲集が、メシアンの強いキリスト教信仰によって作曲されているのに対して、《ハラウイ》は一見、対照的なテーマを持っているように推測し、メシアンにおける神への愛と人間的な愛との関係を明らかにして行く。

第一節トリスタンとイゾルデにおいてはトリスタン伝説の本来の姿を明らかにし、メシアンが《ハラウイ》にテーマとして使ったトリスタン伝説とはどのようなものかを探って行く。

第二節ペルーの民謡と《ハラウイ》においては、メ

シアン自身が《ハラウイ》を作曲するのに多くのインスピレーションを得たと語っているベクラール・ダルクール夫妻の《アメリカンインディアンの民謡集—エクアドル、ペルー、ボリビア—》と『アンデス山脈の音楽』の二つの文献を参照しつつ、ペルーにおいて16世紀前半にスペインに征服される前に使われていたクチュク語と、メシアンの書いた《ハラウイ》の詩との関係を見て行く。

第三節においては、メシアンの歌曲作品の中で一番最後の作品であるため、彼の作曲技法の集大成でもあり、大変興味深い作品である《ハラウイ》を音楽的に分析しながら、メシアンの語法の例を幾つか取り出して行く。イヴォンヌ・ロリオ夫人から得たアドバイスも交えて、ペルーの民謡がどのようにメシアンによって変えられて行ったかを見て行く事もこの節の大切なポイントである。最後に多くのメシアンの弟子の中から吉田進氏、ピエール・ブーレーズ氏を筆者は選び、メシアンに関するインタビューを行い、その結果と筆者のメシアンの歌曲研究のまとめを提示する。